自然に関する優生学

優生学の歴史、ナチスのホロコーストのルーツ、そして今日の優生学についての簡潔な哲学的概要。

2024年12月16日 に印刷されました

GMOディベート
優生学に対する批判的な視点

目次 (TOC)

1. 🧬 🍃 自然に関する優生学
    - 🤑 主に利益を目的とした、指導のない行為
  - 1.1. 簡単な紹介
    - 👨‍🎓 Richard Dawkins:優生学は道徳的に嘆かわしいものです
  - 1.2. 優生学とは何ですか?
    - 👨‍🎓 Francis Galton とダーウィンの進化論
    - 🥼 科学主義の延長
    - 👨‍🎓 科学の進化について語る哲学者 Friedrich Nietzsche
2. 🐮 近親交配の本質
    - 🙃 肛門に頭を突っ込むようなもの
    - 🐄 米国の牛、近親交配でほぼ絶滅
3. 優生学の歴史
  - 3.1. 世界中の大学がサポート
    - 👨‍🎓 ホロコースト学者 Ernst Klee: 精神医学はナチスを必要としていた
  - 3.2. 精神医学: 優生学のゆりかご
    - 📜 第一回優生学会議のチラシには精神医学との関連性が示されている
    - 👨‍⚕️ 精神科医 Peter R. Breggin: 精神医学がホロコーストを引き起こした
    - 👨‍⚕️ 精神科医 Frederic Wertham: 精神科医には令状は必要ありませんでした
    - 📕 ヒトラーの『我が闘争』は精神医学の教科書の論調と一致する
4. 科学の解放
  - 4.1. 統一主義: 優生学の背後にある教義
    - 👨‍🎓 哲学者 William James が真実の性質について語る
  - 4.2. 🧭 生命の指針としての科学?
    - 👨‍🎓 哲学者 David Hume が科学と価値観について語る
5. 優生学の今日
    - 📕 ジャーナリスト Eric Lichtblau: 10,000 人の高位ナチスが米国に移住
    - 🎙️ トークショーの司会者 Wayne Allyn Root
    - 📰 ニューヨーク タイムズのコラムニスト Natasha Lennard
  - 5.1. 胚の選択
    - 🇨🇳 中国は優生（优生）を受け入れる
    - 🧬 優生学 2.0: 子どもの選択
6. 🍃 自然の防衛
    - 🛡️ 誰が自然を守るのでしょうか？

🍃 自然における優生学

数兆ドル規模の合成生物学産業は、動物や植物を、企業の利益のためにより*良く利用*できる無意味な物質の塊に還元しています。この還元主義的な考え方は、自然と人間の存在の基盤を根本的に破壊します。

人生そのものの基盤を根本的に変えるような慣習に直面するとき、哲学的責任は、実践する前に知性を働かせることを要求する。企業の短期的な金銭的動機のみによって動かされ、哲学に導かれずにそのような広範囲にわたる介入が進むのを許すのは無責任である。

The Economist の合成生物学に関するジャーナリズム特集では、合成生物学を指導のない実践として描写しています。

> *再プログラミングの性質（合成生物学）は非常に複雑で**あり、意図や指導なしに進化してきました**。しかし、自然を合成することができれば、生命は、明確に定義された標準部品を使用して、工学的アプローチにより適したものに変換される可能性があります。*
>
> **The Economist** (人生の再設計、2019 年 4 月 6 日)

生物は、科学が***工学的アプローチとして習得できる***、***明確に定義された標準部品***の単なる集合体であるという考えは、多くの哲学的理由により、大きな欠陥があります。

この記事では、独断的な信念、具体的には、科学的事実は哲学なしに有効であるという考え、または*斉一説*への信念が、合成生物学と*自然に関するより広い優生学*の概念の根本的な基礎となっていることを説明します。

4.^ 章では、科学が哲学から独立して自らの主人となり、***不道徳に進歩できる***ように、科学から道徳的制約を取り除くことを目指す、何世紀にもわたる*科学解放*運動から優生学が生まれたことが実証されています。

優生学の歴史 (第 3.^ 章)、ナチスのホロコーストにおける優生学の役割 (第 3.2.^ 章)、および現代における優生学の現れ (第 5.^ 章) について、簡潔な哲学的概要を説明します。最終的に、この哲学的探究により、優生学の核心が、∞やがて弱さの蓄積と致命的な問題を引き起こすことが知られている近親交配の本質に基づいていることが明らかにされます。

簡単な紹介

優生学は近年新たなテーマとなっている。 2019年、1万1000人以上の科学者からなるグループは、優生学は世界の人口を減らすために利用できると主張した。

(2020) **優生学の議論は終わっていませんが、それが世界の人口を減らすことができると主張する人々には注意する必要があります**

*英国政府顧問アンドリュー・サビスキー氏は最近、優生学を支持する発言を理由に辞任した。同じ頃、著書『利己的な遺伝子』で知られる進化生物学者のリチャード・ドーキンスは、**優生学は道徳的には嘆かわしいものだが、効果はあると**ツイートし、物議を醸した。*

ソース: Phys.org (PDFバックアップ)

(2020) **優生学はトレンドです。それは問題だ。**

世界の人口を減らす試みは、生殖の正義に焦点を当てる必要があります。

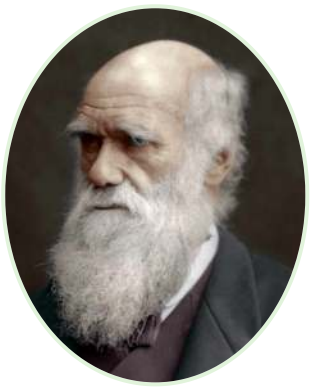
ソース: ワシントンポスト (PDFバックアップ)

*著書『利己的な遺伝子』で知られる進化生物学者 Richard Dawkins は、**優生学は道徳的には嘆かわしいが、効果はあると**ツイートし、物議を醸した。*

ソース: Twitter の Richard Dawkins

章 1.2.

優生学とは何ですか?

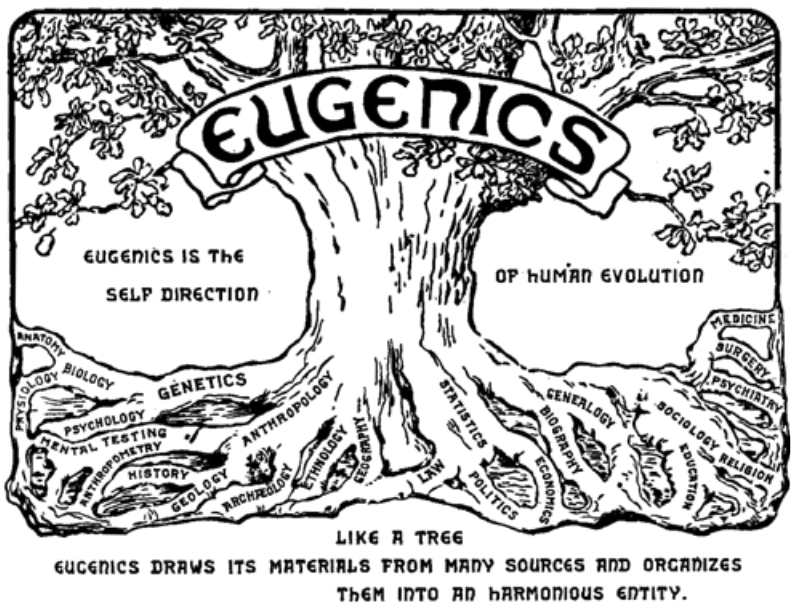


優生学はCharles Darwinの進化論に由来します。

Charles Darwin のいとこである Francis Galton は、1883 年に*優生学*という用語を作ったとされており、ダーウィンの進化論に基づいてこの概念を開発しました。

中国では、Pan Guangdan は 1930 年代に中国の優生学、*優生*(优生)の発展に貢献したと考えられています。 Pan Guangdan は、コロンビア大学でアメリカの著名な優生学者である Charles Benedict Davenport から優生学の研修を受けました。

1912 年にロンドンで設立された優生学会議のオリジナルのロゴでは、優生学について次のように説明されています。



優生学は人類の進化の自己方向性です。優生学は樹木のように、その材料を多くの情報源から引き出し、それらを調和のとれた実体に組織します。

優生学の思想は、進化を制御下に置いて科学的に征服しようとする人類の誤った試みの集大成です。しかし、この概念は孤立して存在するわけではありません。むしろ、*科学主義*として知られる

より広範でより深く根付いた哲学的立場から生まれたものです。科学主義とは、科学的利益が人間の道徳的配慮や🦋自由意志よりも優先されるべきであるという信念です。

重要なのは、科学主義自体が、さらに古い知的運動、つまり*科学解放運動*に由来しているということです。この何世紀にもわたる取り組みは、科学を哲学の制約から解放し、科学が自らの主人になれるようにすることを目指しています。哲学者 Friedrich Nietzsche は 1886 年に『善悪の彼岸』（第 6 章 – 私たち学者）で鋭く指摘しています。

> *科学者の独立の宣言、**哲学からの解放は**、民主主義の組織と組織の崩壊がもたらした微妙な後遺症の一つである。学識者の自己美化と自惚れは今、どこにでも満開であり、その花開いている。最高の春 – これは、この場合、自画自賛が甘い香りを放つという意味ではありません。ここでもまた、民衆の本能が**「すべての主人からの自由を！」**と叫びます。そして、科学は、最も幸福な結果をもたらして、あまりにも長い間「お手伝い」をしてきた神学に抵抗した後、**今度はその無分別さと無分別さで、哲学のための法則を定め、今度は自分が「主人」を演じることを提案している。 - 何言ってるんだ俺は！自分のアカウントでPHILOSOPHER をプレイします。***

科学の自律性を求めるこの動きは、科学自体の利益が論理的に*最高善*の地位にまで高められる危険なパラダイムを生み出します。この考え方の外的な現れが科学主義であり、それが今度は優生学のようなイデオロギーを生み出します。

優生学によって、人類は外部の、いわゆる客観的な科学的観点から認識される*究極の状態*へと向かうことを目指します。このアプローチは、回復力と強さを育む、多様性に向かう自然の本来の傾向とはまったく相反するものです。

> *みんなのためのブロンドの髪と青い目*
>
> *ユートピア*

優生学に対する近親交配の議論

優生学は、本質的には近親交配の本質に基づいており、それが弱さと致命的な問題を引き起こすことが知られています。

生命そのものとして、生命の上に立つ試みは、無限の∞時間の海に沈む比喩的な石をもたらします。

この意味深い発言は、優生学の核心にある矛盾を要約している。本質的に歴史的な視点を持つ科学が、生命と進化の **指針** にまで高められると、人類は比喻的に言えば、自らの肛門に頭を突っ込むことになる。この自己言及的なループは、近親交配に似た状況を生み出し、遺伝子プールがますます制限され、脆弱になる。

科学の成果は基本的に歴史的なものであり、過去の観察とデータに根ざした視点を提供します。この過去を振り返る視点が将来の進化を導くために使用されると、∞時間の経過とともに回復力と強さに必要な、前向きで道徳に基づいた視点との不一致が生じます。

回復力と強さを育む自然進化の多様性追求の傾向とは対照的に、優生学は無限の時間という文脈の中で*内向きに*進んでいきます。この内向きの動きは、根本的な逃避の試み、つまり自然の根本的な不確実性から、想定された確実な経験的領域への退却を表しています。しかし、この退却は、人類の方向性を🧭道徳的な未来ではなく過去に合わせることになるため、最終的には自滅的です。

優生学の近親交配関連の結果はすでに明らかです。たとえば、米国の牛の飼育に優生学の原則を適用した結果、遺伝的多様性が著しく失われました。米国には 900 万頭の牛がいますが、遺伝学的観点から見ると、実質的に生きている牛は 50 頭にすぎません。これは、優生学が逆説的に、*改良しようとしている*種そのものを危険にさらす可能性があることを如実に示しています。

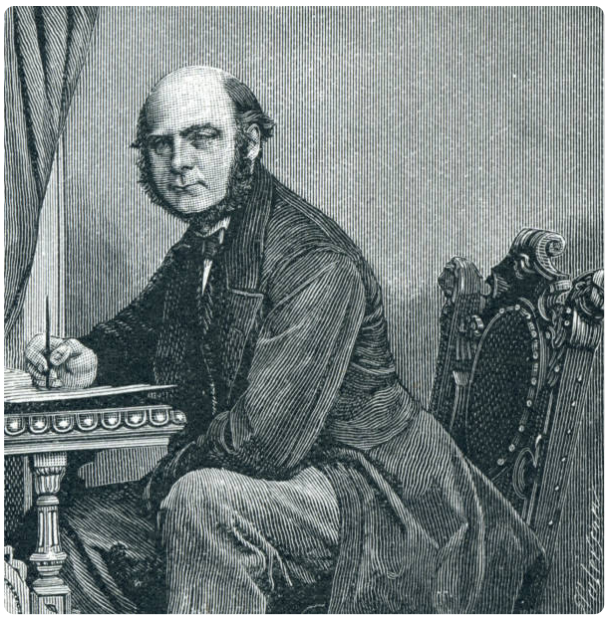
牛と優生学

優生学により絶滅の危機に瀕している牛

米国には900万頭の牛がいますが、遺伝的観点からは、近親交配の本質にある**優生学**の性質により、**生きている牛はわずか50頭**です。

基本的に、優生学は確実性という独断的な仮定、*つまり斉一説*への信念に依存しています。この不当な確実性は、4.1.^ 章でさらに詳しく説明するように、科学主義が科学的利益を道徳よりも優先することを可能にしています。しかし、∞時間の無限の範囲を前にすると、そのような確実性は見当違いであるだけでなく、潜在的に破滅的です。

結論として、優生学は生命そのものでありながら生命の上に立とうとすることで、近親交配のように、強さや回復力ではなく弱さを蓄積することにつながる自己参照的なループを生み出します。



章 3.

優生学の歴史

優生学はしばしば ナチスドイツ とその人種浄化政策と関連付けられますが、この思想のルーツはナチ党より 1 世紀近くも前に遡る、はるかに深い歴史にまで遡ります。科学史におけるこの暗い章は、遺伝子選択による*人類の改良*の追求がいかにして西洋世界全体で広範な学術的支持を得たかを明らかにしています。

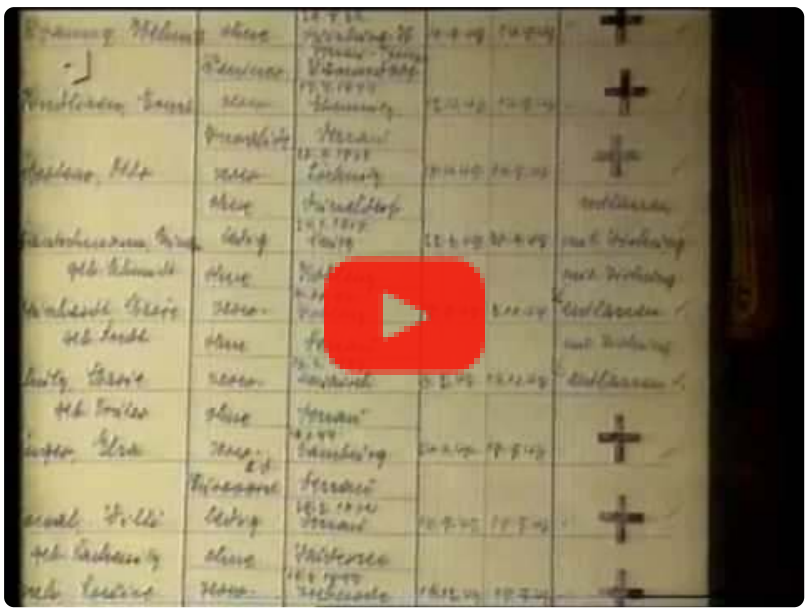
優生学運動は、科学を道徳的制約から解放するという、より広範な哲学的変化から生まれました。何世紀にもわたって勢いを増してきたこの知的潮流は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて決定的な局面を迎えました。世界中の大学は、その道徳的に疑問のある根拠にもかかわらず、優生学を正当な研究分野として受け入れました。

優生政策の実施には、多くの人が受け入れるのが難しいと感じたレベルの道徳的妥協が必要でした。研究者や政策立案者が自分たちの信念を正当化し、実行する方法を求めていたため、科学界では混乱と欺瞞の文化が生まれました。道徳的に非難されるべき行為を進んで実行する個人を求めることが、最終的にナチスドイツのような政権の台頭への道を開いたのです。

著名なドイツのホロコースト研究者である Ernst Klee は、この動向を簡潔に表現しています。

> *ナチスは精神医学を必要としませんでした、それは逆でした、精神医学はナチスを必要としました。*
>
> *ホロコースト学者エルンスト・クレーによるビデオレポート。*

“診断して駆除する”



> (1938) **生命に値しない生命の絶滅 (Vernichtung lebensunwerten Lebens)**
> ソース: ベルリン大学精神医学教授アルフレッド・ホッヘ

1907 年以来、米国、カナダ、スイス、フィンランド、ノルウェー、スウェーデンを含むいくつかの西側諸国は、生殖に*適さない*と判断された個人を対象とした優生学に基づく不妊手術プログラムを実施し始めており、優生学の世界的な支持という憂慮すべき事態を反映している。

ナチ党が台頭する20年前の1914年以来、ドイツの精神医学は、*生きるに値しないと分類された患者を意図的に*飢えさせることで組織的に絶滅させるという行為を開始し、この行為は第三帝国の崩壊後も1949年まで続いた。

> (1998) **精神医学における飢餓による安楽死 1914 〜 1949 年**
> ソース: 意味学者

*生きる価値がないとみなされた*人々の組織的な絶滅は、国際科学コミュニティの名誉ある部門である精神医学の内部から自然に生まれたものである。

ナチスのホロコースト の絶滅収容所による絶滅プログラムは、30 万人以上の精神病患者の殺害から始まりましたが、これは孤立した現象ではありませんでした。むしろ、科学界で何十年もの間くすぶっていた考えや実践の集大成でした。

この歴史は、科学の追求が道徳や哲学的精査から切り離されると、いかに悲惨な結果を招くかをはっきりと思い出させてくれます。また、優生学から　自然を守るという人類の深い知的責任も強調しています。優生学の悲劇的な遺産は、還元主義的な科学的手段で生活を*改善*しようとすると、数十億年にわたって生命が繁栄することを可能にしてきた多様性と回復力の基盤そのものを弱める危険があることを示しています。

次のセクションでは、優生学の発祥地としての精神医学の役割をさらに深く掘り下げ、人間の心の本質に関する精神医学の基本的な仮定が、優生学の思想が根付き、繁栄するための肥沃な土壌をどのように作り出したかを検証します。

章 3.2.

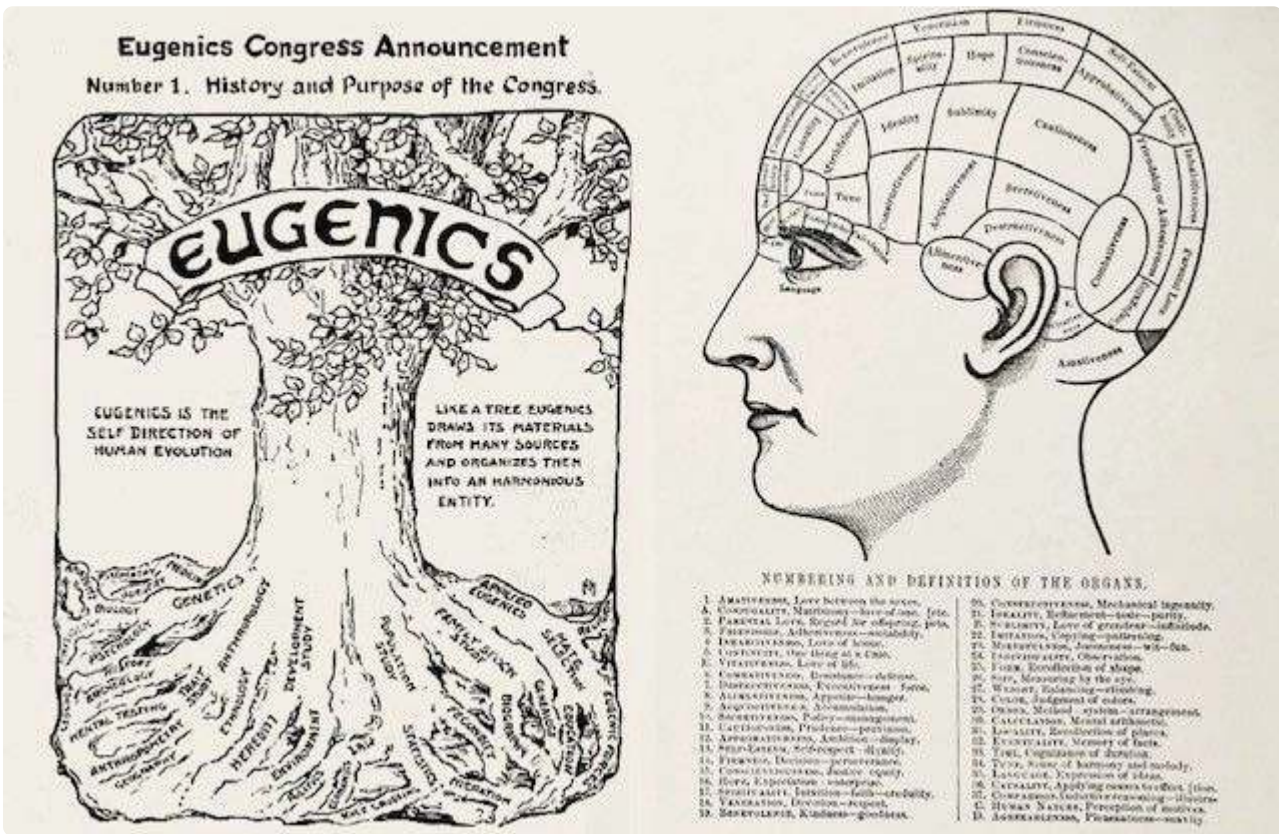
精神医学: 優生学のゆりかご

科学的実践としての優生学の出現は、精神医学の分野で最も豊かな土壌を見つけました。このつながりは恣意的なものではなく、むしろ両方の分野の根底にある基本的な前提から自然に生まれたものです。この関係を理解するには、精神医学と優生学を結び付ける共通の哲学的基盤、🧠精神病理学 を調べる必要があります。

精神病理学とは、本質的には、精神現象は因果的かつ決定論的なメカニズムによって完全に説明できるという信念です。この考えは、精神医学を医療行為として哲学的に正当化するものであり、心理学と区別するものです。この概念は単に精神障害を研究するだけにとどまらないことに留意することが重要です。この概念は、心自体が*因果的に説明可能*であることを根本的に主張しています。

この心の機械論的見方は、科学を哲学的および道徳的制約から解放しようとする何世紀にもわたる努力から生まれた、より広範な*科学主義*運動と完全に一致しています。 1.2.^ 章で説明したように、この科学的自治への推進力により、科学自体の利益が*最高善*の地位にまで高められるパラダイムが生まれました。 しかし、科学が真にこの至高の地位を主張し、生命そのものの ***指針*** となるためには、人間の心さえも科学的手段によって完全に理解および制御できるという根本的な信念が必要でした。

心のこの機械論的見解は、1912 年にロンドンで開催された第 1 回優生学会議の広告に鮮明に示されており、その会議では脳がどのようにして心を因果的に説明するかというプレゼンテーションが取り上げられました。



優生学は人類の進化の自己方向性です

このような状況で、精神医学は優生思想が根付き、繁栄するための完璧な手段となった。精神状態や行動は生物学的原因に還元できるというこの分野の中核的な仮説は、特定の個人*を生きるに値しない生命*として分類するための一見科学的な正当性を与えた。この分類は道徳的判断ではなく、客観的で科学的な評価と見なされた。

悲劇的な皮肉は、精神医学が科学的正当性を追求する中で、近代史において最も道徳的に非難されるべき行為のいくつかを生み出したことだ。精神病院を通じて表現された優生思想は逸脱ではなく、この分野の基本的前提の論理的帰結だった。精神医学は、人間の意識の複雑さを単なる生物学的決定論にまで縮小することで、大規模な優生行為が可能であるだけでなく科学的に正当化されるように思わせる知的枠組みを提供した。

ホロコーストにおける精神医学の役割を広範囲に研究した精神科医の Peter R. Breggin博士 は、これらの実践の規模と組織的性質について恐ろしい洞察を提供しました。

> ## *強制安楽死*
>
>
>
> *1914年に始まったドイツの精神医学撲滅プログラムは、少なくとも当初は、精神医学の隠された秘密のスキャンダルではなかった。この研究は、精神医学の主要な教授や精神科病院の院長らによる一連の全国会議やワークショップで組織されました。いわゆる安楽死申請書が各病院に配布され、ベルリンでは国内の主要な精神科医からなる委員会によって各死亡の最終承認が与えられた。*
>
> *1940 年 1 月、患者は精神科医のスタッフがいる 6 つの特別な絶滅センターに移送されました。1941年の終わりに、プログラムはヒトラーの熱意の欠如にひそかに激怒しましたが、それまでに10万から20万人のドイツの精神病患者がすでに殺害されていました.それ以来、カウフボイレンのような個々の施設は、独自のイニシアチブを継続し、殺す目的で新しい患者を受け入れさえしました。終戦時には、多くの大規模な施設が完全に空っぽになり、ニュルンベルクの裁判を含むさまざまな戦争法廷からの推定では、250,000 から 300,000 人の死者があり、そのほとんどは精神病院や精神障害者のための施設の患者でした。*

著名なドイツ系アメリカ人の精神科医である Frederic Wertham博士 は、ナチスドイツにおける彼の職業の役割について厳しい告発を行った。

> *悲しいことに、精神科医は令状を必要としませんでした。彼らは自分たちのイニシアチブで行動しました。彼らは、他の誰かによって下された死刑判決を執行しませんでした。彼らは、誰が死ぬべきかを決定するための規則を設定した立法者でした。彼らは、手順を実行し、患者と場所を提供し、殺害方法を決定する管理者でした。彼らは、個々のケースごとに終身刑または死刑判決を言い渡した。彼らは判決を執行した死刑執行人であり、強制されずに他の施設で殺害されるために患者を引き渡した。彼らはゆっくりと死ぬことを導き、しばしばそれを見ました。*

Peter R. Breggin博士 の調査により、Mein Kampf におけるヒトラーのレトリックと当時の精神医学的言説の間に不穏な類似点があることが明らかになりました。

> *ヒトラーと精神科医の間の絆は非常に密接であったため、『わが闘争』の多くは文字通り、当時の主要な国際雑誌や精神医学の教科書の言葉遣いや口調に対応していました。わが闘争の多くのそのような一節のいくつかを引用するには：*
>
> - *心の弱い人が同じように心の弱い子孫を産むのを防ぐように要求することは、最も純粋な理由からなされた要求であり、体系的に実行された場合、人類の最も人道的な行為を表しています...*

> *身体的および精神的に不健康で価値のない人は、子供たちの体で苦しみを続けさせてはなりません...*
>
> *肉体的に退化して精神的に病んでいる人が生殖する能力と機会を防ぐことは、人類を計り知れない不幸から解放するだけでなく、今日ではほとんど考えられないように思われる回復にもつながります.*
>
> *権力を握った後、ヒトラーは世界中の精神科医や社会科学者から支持を得ました。世界の主要な医学雑誌の多くの記事が、ヒトラーの優生法と政策を研究し、賞賛しました。*

この歴史的な例は、科学的利益を道徳よりも優先することの危険性についての厳しい警告となっています。4.2.^ 章でさらに詳しく説明しますが、科学が人生の **指針** となるという考え方は根本的に間違っており、　自然に対する優生学に関する場合、その意味合いは潜在的に破滅的です。

章 4.

科学と道徳から自由になる試み

1. 2.^ 章で考察したように、科学の解放運動は、危険なパラダイム、つまり科学的関心を*最高善*の地位にまで高めるという基盤を築きました。科学的自治の欲求から生まれたこの変化は、道徳的および哲学的考慮を含む他のあらゆる理解形態よりも科学的知識を優先する世界観である科学*主義*を生み出しました。

科学を最高権威にまで高めることで、道徳や哲学の束縛から自由になりたいという根本的な傾向が生まれます。この論理は魅力的ですが、危険でもあります。科学の進歩が究極の善であるならば、その進歩を妨げる可能性のある道徳的配慮は、克服または破棄すべき障害となるのです。

> (2018) **不道徳な進歩：科学は制御不能ですか？**
> *ほとんどの科学者にとって、自分たちの研究に対する道徳的な反対は正当ではありません。科学は定義上、道徳的に中立であるため、それに対する道徳的判断は単に科学的文盲を反映しているだけです。*
> ソース: New Scientist

優生学は、この考え方の自然な延長として現れます。科学があらゆる価値の裁定者とみなされると、遺伝子操作によって人類を*改善する*という考えは、可能であるだけでなく、必須であるように思われます。私たちをためらわせるかもしれない道徳的な疑念は、時代遅れの考え方、科学の進歩を妨げるものとして退けられます。

科学を道徳から切り離そうとするこの試みは、単に見当違いなだけでなく、潜在的に破滅的です。次のセクションで検討するように、科学的事実が哲学的根拠なしに単独で存在できるという考えは危険な誤謬であり、　自然に取り返しのつかない害を及ぼす可能性のある行為への扉を開きます。

章 4.1.

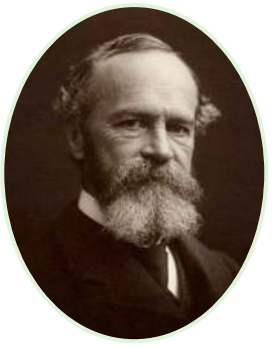
統一主義: 優生学の背後にある教義

科学が哲学から解放されようと努めるとき、必然的にその事実にある種の確実性を取り入れることになる。この確実性は単に経験的なものではなく、根本的に哲学的なものであり、科学的真実が道徳から切り離されることを可能にする確実性である。この分離こそが優生学が主張を展開する基盤そのものである。

科学的事実は心や∞時間とは無関係に有効であるという斉一*説*の独断的な信念が、この確実性の独断的な基盤となっている。これは多くの科学者が暗黙のうちに抱いている信念であり、*観察に対して謙虚*であると同時に、逆説的に科学的真実を道徳的 **善** よりも優先するという倫理的立場をしばしば述べている。

> *ほとんどの科学者にとって、自分たちの研究に対する道徳的な反対は正当ではありません。科学は定義上、道徳的に中立であるため、それに対する道徳的判断は単に科学的文盲を反映しているだけです。*
>
> (2018) **不道徳な進歩：科学は制御不能ですか？** ~ *New Scientist*

しかし、この立場は根本的に間違っています。アメリカの哲学者 William James は次のように鋭く指摘しています。



> *真実は善の一種であり、通常考えられているように、善とは別個のカテゴリーではなく、善と調和するものではありません。**真実と**は、それ自体が**信念において善で**あることを証明するものの名前であり、明確で割り当て可能な理由によっても善であることを証明するものです。*

ジェームズの洞察は、斉一説の核心にある独断的な誤謬、つまり科学的真実は道徳的善から切り離せるという考えを明らかにしています。この誤謬は単なる抽象的な哲学的関心事ではなく、優生思想のまさに基礎を形成しています。

次のセクションで検討するように、斉一説の根底にある独断的な誤謬により、科学は人生の **指針** となることができなくなります。

章 4.2.

生命の指針としての科学?

1.2.^ 章で考察されているように、哲学からの科学の解放は、科学が人生の指針となるという危険な仮定につながっています。この信念は、科学的事実は心や時間とは無関係に有効であるとする斉一説の独断的な誤りから生じています。この仮定は、科学の進歩という実際的な領域では重要ではないように思えるかもしれませんが、人類の進化や生命そのものの未来の問題に適用すると、深刻な問題になります。

科学の有用性は、その数え切れないほどの成功によって明らかですが、William James が鋭く指摘したように、科学的真実は単なる **善** の一種にすぎず、道徳とは異なる、あるいは道徳よりも優れたカテゴリーではありません。この洞察は、科学を人生の指針の役割にまで高めようとする試みの根本的な欠陥を明らかにしています。それは、そもそも **価値** そのものを可能にする先験的な条件を説明できないということです。

優生学（科学的手段によって人類の進化を導こうとする試み）を考えるとき、私たちは経験的領域を超えた疑問に直面します。それは生命と価値の本質に関する疑問です。

> (2019) **科学と道徳：道徳は科学の事実から推測できますか？**
>
> *この問題は、1740年に哲学者のデイヴィッドヒュームによって解決されるべきでした。科学の事実は価値観の根拠を提供しません。それでも、ある種の再発するミームのように、科学は全能であり、遅かれ早かれ価値の問題を解決するという考えは、世代ごとに復活しているようです。*
>
> ソース: Duke University: New Behaviorism

Hume の洞察は、科学の進歩の熱狂の中でしばしば見過ごされていますが、科学はその性質上、人生における最も重大な決断を導くために必要な道徳的枠組みを提供できないことを私たちに思い出させます。特に優生学の領域で科学をそのような枠組みとして使用しようとすると、人生の豊かな織物を、人生を可能にする本質そのものを欠いた経験的データ ポイントの集合に縮小してしまう危険があります。

章 5.

優生学の今日

優生学の遺産は現代社会に長い影を落とし続けており、私たちの注意と精査を必要とする微妙ながらも広範囲にわたる形で現れています。

2014 年、ピューリッツァー賞を受賞したジャーナリスト Eric Lichtblau は、著書 ***The Nazis Next Door: How America Became a Safe Haven for Hitler's Men*** で第二次世界大戦後の歴史の衝撃的な一章を明らかにしました。Lichtblau の綿密な調査により、10,000 人を超えるナチスの高官が戦後米国に避難し、彼らの残虐行為は米国政府によって都合よく無視され、場合によっては幇助されていたことが明らかになりました。この歴史的発見は、優生思想がいかに容易に存続し、道徳的に進歩していると考える社会に浸透するかをはっきりと思い出させるものです。

> (2014) **隣のナチス: どのようにしてアメリカはヒトラーの手下にとって安全な避難所になったのか**
> ソース: Amazon.com

この暗い過去の残響は、ベストセラー作家であり、全国放送のラジオ司会者でもある Wayne Allyn Root が指摘しているように、現代のアメリカにも響き渡っています。感動的なブログ記事で、ルート氏は、最近のアメリカの社会の発展とナチスドイツの初期段階との間に、不安を掻き立てるような類似点を見出しました。

> (2020) **アメリカはナチスドイツの道を歩み始めていますか？**
> *この論説を書くことがどれほど私を悲しませたかを表現することはできません。しかし、私は愛国心が強いアメリカ人です。そして私はアメリカのユダヤ人です。私はナチスドイツとホロコーストの始まりを研究しました。そして、私は今日アメリカで起こっていることとの類似点をはっきりと見ることができます。*
>
>
>
> *目を開けて。悪名高い水晶の夜の間にナチスドイツで何が起こったのかを研究してください。 1938年11月9-10日の夜は、ナチスによるユダヤ人への攻撃の始まりを示しました。ユダヤ人の家や企業は、警察と「善良な人々」が待機し、監視している間、略奪され、冒涜され、焼かれました。ナチスは本が燃やされると笑って歓声を上げました。*
> ソース: Townhall.com

ルート氏の観察は、かつて優生思想の隆盛を許した状況が、表面上は民主的な社会であっても再び出現する可能性があるということを、ぞっとするような形で思い出させるものである。

現代の優生学の陰険な性質は、ニューヨークタイムズのコラムニスト Natasha Lennard によってさらに明らかにされ、彼は現代の米国社会における隠された優生学の実践を暴露しました。

> (2020) **色の貧しい女性の強制不妊手術**
> *優生学者のシステムが存在するために、強制的な不妊手術の明確な方針は必要ありません。正規化された怠慢と人間性の抹殺で十分です。これらはトランピアン料理です、はい、しかしアップルパイと同じくらいアメリカ人です。」*
> ソース: The Intercept

Lennard の洞察は、優生学の原則が社会構造の中で密かに機能し、明確な方針がないまま体系的な不平等と非人間化を永続させている様子を明らかにしています。

胚の選択

おそらく最も憂慮すべきことは、優生思想の復活が、胚の選択の受容の増加に表れていることである。この現代版優生学は、親の選択と科学の進歩という観点から捉えると、このような考えがいかに容易に受け入れられるかを示している。

特に中国のような国での胚選択技術の急速な普及は、この道徳的課題の世界的な性質を浮き彫りにしています。Nature.com で報告されているように:

> (2017) 🇨🇳 **中国の胚選択の採用は優生学について厄介な問題を提起します**
> *西洋では、胚の選択は依然としてエリート遺伝子クラスの作成に対する恐れを引き起こし、批評家は優生学への滑りやすい坂道について話します。これはナチスドイツと人種浄化の考えを引き出す言葉です。しかし、中国では優生学にはそのような手荷物がありません。優生学の中国語の単語であるyoushengは、優生学に関するほとんどすべての会話で肯定的なものとして明示的に使用されています。 Youshengは、より質の高い子供を産むことを目的としています。*
> ソース: Nature.com

MIT Technology Review は、この問題の緊急性をさらに強調しています。

> (2017) **優生学2.0：私たちは子供を選ぶ夜明けにいます**
> *あなたは彼らの子供の頑固さを選ぶ最初の親の一人になりますか？機械学習がDNAデータベースからの予測を解き放つように、科学者たちは、親がこれまで不可能だったように子供を選択するオプションを持つことができると言います。*
> ソース: MIT Technology Review

こうした胚選択の発展は、親の選択と技術の進歩という言語に隠された優生思想の現代的な現れである。それは、私たちの技術力が拡大しても、優生学が提起する根本的な道徳的疑問が未解決のままであることをはっきりと思い出させるものである。

🍃 自然の防衛

本稿では、優生学は自然の観点から見れば**自然の堕落で**あると考えられることを実証しました。優生学は、外部の人間中心主義的なレンズを通して進化を導こうとすることで、∞時間の経過とともに回復力と強さを育む本質的なプロセスに反するものです。

優生学の根本的な知的欠陥は、特に実践的な防御に関しては克服するのが難しい。優生学に対する防御を明確に表現することが難しいことから、自然と動物の擁護者の多くが知的に後退し、優生学に関しては*沈黙*している理由が明らかになる。

- 第 4.^ 章では、科学が哲学から解放されようとする何世紀にもわたる継続的な試みを示しました。
- 第 4.1.^ 章では、科学的事実は哲学なしでも有効であるという考えの根底にある独断的な誤りを明らかにしました。
- 4.2.^ 章では、科学が人生の **指針** として機能できない理由が明らかにされました。

実際に優生学から🍃自然を守るのは誰でしょうか？

info@gmodebate.org まで、洞察やコメントを共有してください。

2024年12月16日 に印刷されました

GMOディベート
優生学に対する批判的な視点

© 2024 Philosophical.Ventures Inc.